

大変なことは？

昔に比べて着物を着る機会が減って、草履の良さを知る人も少なくなってきました。草履の文化と、上げる技術を、どうにかして後世に伝えていきたいと思っています。

どんな仕事ですか？

草履を上げる専門家です。着物を着るときには、草履を履きますね？ 草履は、「台」と「花緒」と呼ばれる2つの部分でできています。足の形に合わせて台に花緒を上げて、お客さまにぴったりの草履を提供します。

仕事のやりがいは？

「履いていて気持ちがいい」「草履ってこんなに楽だったのですね」お客さまからこんな声を頂くと、うれしいですね。この仕事を応援して下さる方がいることも、励みになります。



はきものしよくにん
履物職人

ながい ゆきふみ
永井之文さん
しものせき ししゅつしん
下関市出身

仕事図鑑



このページは、小・中学生、高校生を対象に市内で働く人・職業を紹介しています。先輩たちのメッセージを参考に、未来の自分を探してみませんか。

草履は足が痛くなる？

手際よく台に穴をあけ、花緒を上げる姿はまさに職人。幼い頃から、父親が草履を上げる様子そばで見、自然と覚えたのだといいます。

「同じ23・5センチの足でも、足の甲が高い人もいれば低い人もいます。LやMといった大きな区分ではなく、一人ひとりの足に合うように花緒を微調整して仕上げています」足に合わせて上げた草履は、履いていて疲れにくく、痛くないのだそうです。

本物を知ってほしい

シーモールで和装専門店を営む永井さんは、西日本でも数少ない履物職人。尋ねてくるお客さんは、大阪から沖縄まで広範囲にわたります。「着物が無くならない限りは絶対に草履が要る。靴を履くわけにはいかないでしょう。1年でも2年でも長く、続けていたらいいなと思います。興味を持ってくれる人が現れたら、うれしいですね」

▼職人の熟練の技が
生み出す本物の草履
広報戦略課 YouTubeへ



花緒を上げた具合を
草履に差し込んだ
手の感覚で確かめる。



50年間使い続けてきた道具たち。